

真夏の熟女の

シヨタチンレツスン



うさぎロボ 著

一章 ショタを食った？ これはタイーホやろなあ

セミの鳴き声が響き渡っていた。

道の片側には田んぼ、反対側には山の斜面。

そんな田舎道に建つバス停。

山側にしか壁のない開放型の建物。

時刻表の前にはかなり小柄な少年。一〇歳行くかどうか。気弱そうで伏し目がち。

時刻表を見ているわけではない、今バスから降りてきた所なのだ。

年齢的に一人でバスに乗るのは危ない気もするが、この夏休み、初めて祖父母の家に一人で行くことになったのだった。あとはバス停に祖父の車が迎えに来てくれる。

やや内股。

周りを見てため息をつく。

そのバス停に、友人に車で送ってもらって女が一人降りて来る。四〇少しぐらいで、まだまだ若いといえば若い子供がもう大学生と考えると結構いっているともいえる。

見た目的は、かなり若い目で三〇半ば程度に見える。が、あまり年齢には目がいかないだろう。

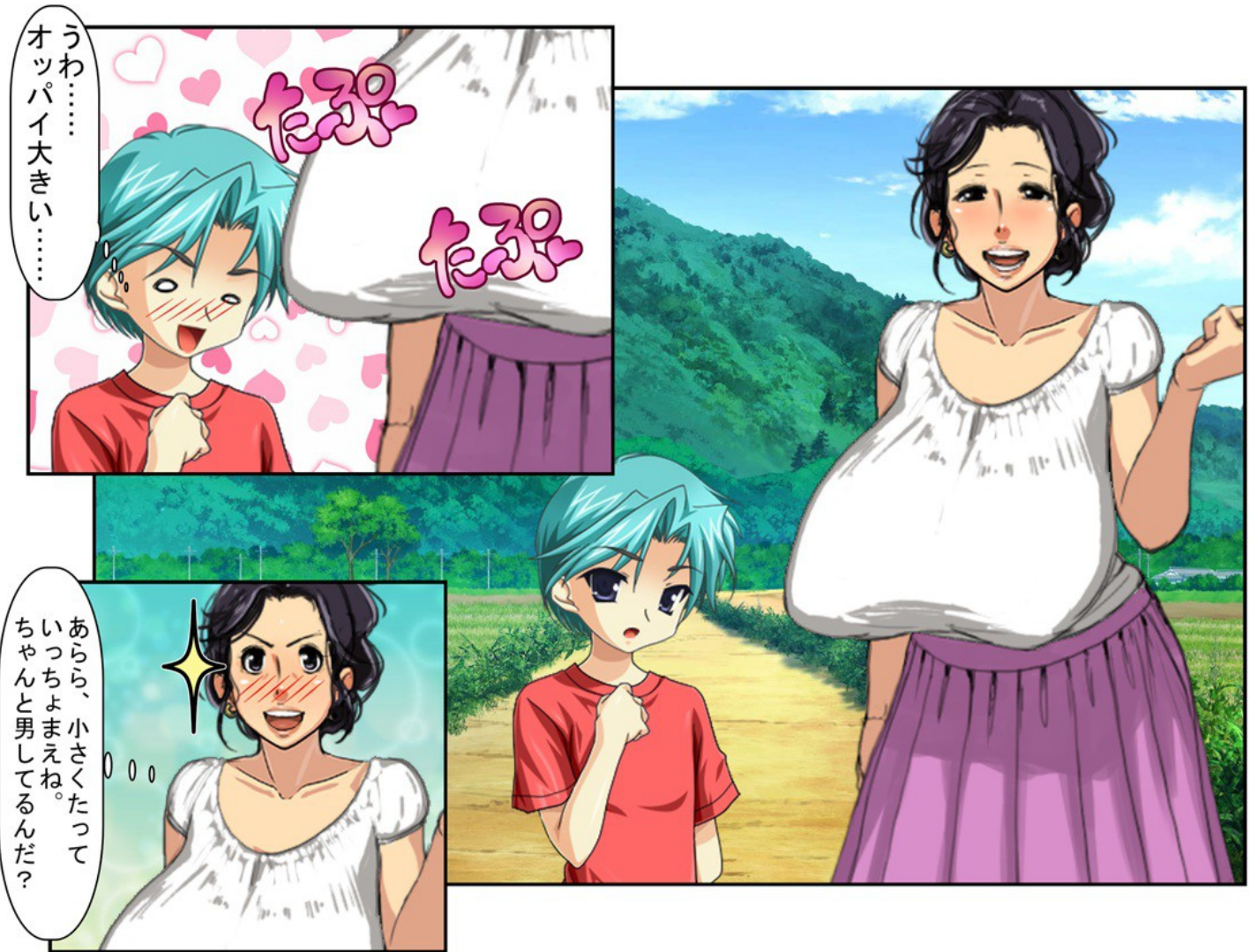
彼女に気づいた少年も、思わず目を取られるのはその胸元だった。

——うわ……オッパイ大きい……

歩くだけでゆさゆさと揺れるスイカ、それも二つセット。爆乳というしかない。

目線に気づき、内心微笑む熟女。

——あらら、小さくたっていっちょまえね。ちゃんと男してるんだ？



ちらっと少年を観察する。シャツは割とぴっちりしていて華奢なのがわかる。ズボンはぶかぶかで分厚い布の物だが、足も細いのが足首から見て取れた。

——ゾウさんも小さくてかわいいんでしょうね。見たいわー。別にショタってわけでもないけど。

「ここ、一時間に一つぐらいしかバスが来ないのよね」

「え、ああ、そうなんですか」

「待ってるわけじゃないの？ あ、君今降りてきたんだ？ お姉さんはもちろん次のに乗るつもりよ。えーっと、次のバスは……」

町へのバスは後三十分ほどだ。

少し早く来過ぎた、という事もない。下手にギリギリに来て逃したダメージの大きさを考えれば、十分や二十分早く来るのは当然、それが田舎の時間のありようだ。

「もしかして、おじいちゃんところに遊びに来たとか？」

「何でわかるんですか？」

「そりゃ、なんとなくね……っていうか、一人で偉いじゃない。やっぱり男の子ね、しっかりしてるわ」

ベンチに座る熟女。それだけでやはりスイカ二つが大きく揺れる。唾をのむ少年。

「お姉さん、椎名っていうの」

「あ、僕、塔野逸樹です」

「逸樹くんね。塔野さんか……聞いたことあるような……ないような……横、座らない？」

「あ、そうですね」

促され、座りつつ何かもぞもぞする逸樹。

それを見るときもなく気づきつつ椎名。

——あら、チン○ン立っちゃった？ お姉さんオッパイ大きい美人さんだもんね、横にいてだけでチン○ン立つよねー、って、んなわけないわよね。元気過ぎよいくら若いからって。チンポジチェンジ、って感じでもないし。これはアレね、おしっこでも我慢してんのね。周りにトイレもないし。多分都会からこの田舎に遊びに来た、気の弱い男の子に取っちゃ、この辺で立ちションもきついんでしょね。

ちらちらと、周りを見る逸樹。見ても、田んぼしかない。いや、かなり遠くになら民家も見えるが。

「ん……逸樹くん、もしかしたら、おしっこしたい？」

「え、いやその……まあ」

「うふ、それじゃトイレ行こうか」

「え、ここにあるんですか？」

「もちろんよ」

立ち上がり、山の方に歩き出す。小走りですついでくる逸樹。

バス停の小屋の後ろ、山と壁の間に入る。外からはかなり死角だ。

「えーっと、トイレは」

「ここよ」

「え、でも……」

見上げてくる不安げな逸樹。その表情にゾクリとする熟女。

——こりゃ、可愛いわね……というか、捕食したくなるというか。保護したくなるというか……天性のマダムキラーって感じね。いや、マダムって程の歳でもないけど私は。

考えつつ、笑いかける。

「大丈夫、男の子でしょ逸樹くんは」

膝を開き、山に向かって腰を突き出し、鉛筆でも摘む形を女の部分の前でする。

「男らしくこうしちゃおう。立ちションはね、チン○ン付いてる男の子の特権なのよ」

「え、そんな……」

顔を真っ赤にする。こんなところで立小便をすることを想像して。それ以上に目の前の大人の女性が明らかに何か摘んでいる形で、立小便の真似をしてみせている状況に羞恥を覚えて。

「ん……」

——やば、ほんとかわいいじゃんこの子。こんなの絶対、摘んであげる。っていうか、摘ませる。っていうか、摘ませてください、オナシャッス！ チン○ンチン○ンショタチン○ン、小さくかわいいショタチン○ン。

「恥ずかしがることないわよ。あそうだ、お姉さんが摘んであげるから！ それならできるでしょ？」

——どういう理論だってばよ。自分でも分からないわ。摘んでもらったらできるでしょって。でもお姉さん、君のペ○スが摘みたいです！ だから強引にこの理論でいくわ、エッチなお姉さんを許してね！

「お姉さん大人だから摘まみ慣れてるの。うちの子の、小さいときに摘んであげてたのよ」

しゃがみ、目線の高さを合わせて肩を叩く。

——あー、華奢な肩……男とは言え、力全然ないのがわかるわ。これなら無理やり抑え込んでおチン○ン好きにするなりなんでもできるわ。婦人会の護身術講習でならったキ○タマ潰しなんて必要なさそうね。

「さ、おしっこしたいんでしょ？」

「そ、それじゃ……でも、僕自分でできるから……あ」

逸樹のズボンに手を伸ばす熟女。

「はいはい、おチン○ン出しましょうね……え」

ズボンを下げると、ブリーフ。

目を剥く熟女。ブリーフに驚いたのではない、その中身が異様な重厚さでブリーフを膨らませていることに面食らったのだ。

——ちょ、なにこれ……膨れ上がって……いや、そりゃ男の子だから膨れてるのは当たり前だけど、幼いとはいえ、私のパンツより絶対膨らんでるでしょうけど。でもこれ……サッカーボールでも入ってんのかってボリュームで、っていうか、大蛇浮き出てるし！ うわ、先っぽの形もガッツリ。うわ、ほんとこれ大蛇だよ、長さも太さもあり得ないわ……大人でもこんなのまずないわよ。ましてこんな子供じゃ……

思わず凝視してしまう。ブリーフの下のアナコンダを。

息を詰まらせ、顔を赤らめる。

急に動かなくなった熟女に気づき、きょとんとした顔で見上げる逸樹。

「おばちゃん、どうしたの？」

「あ、その、あは、逸樹くんのおチン○ン大きいんだね？ パンツ越しでもわかっちゃうよ」

「え！ そ、そんなこと無いですよ……あ、そうだ、周りの子はもっと大きいんですよ！」

思わず吹き出す熟女。

「いやいや、嘘でしょ？ 逸樹くんの、大人の男の人の横にいても、チン○ンだけ見たら子供だってばれないよ？ 大きいもん」

「そ、そうですか？ あ」

「そうよ？ それじゃ、出しちゃうね……お、おおお！ 予想以上にブランブラン……」

ブリーフを下げると、大蛇が地面に向けて飛び降りる。頭が本当に地面につきそうに椎名には見えた。もちろん実際にはそこまではいかないが、膝の間まで余裕で届いてはいる。当然のようにズル剥けで皮を戻そうにも戻せない巨頭である。

目を輝かせてため息をつく熟女。

「やだ……うわ……ほ、ほんとに大きいねえ？ 立派なおチン○ン……男らしいぞ、逸樹くん。うほ、ぶつといわ……摘むなんて無理、持ち上げなきゃ……」

巨棒を両手で捧げ持つようにする椎名。重さに息をのみつつ、先ほどから見向きもしていなかった逸樹の顔の方を見る。

「さ、出しちゃって……おおっ、でるでる、ホースがぶつといから水も大量に出るわねえ」

じよばば、とバス停の壁に放出する。と、反射が足に掛かる。

しゃがんでいて動けない椎名が仰け反る。

「うおおお！ ションベンがっ！ ちょ、逸樹くん！」

「だ、だって壁に近い所に立たせるからっ！」

「でも普通はこのぐらいで……あっ、チ○が長いから壁に近い所から出ちゃうんだ！ だから反射が……大きいのも善し悪しね……」

ともかく、何とか尿を終える。先端を振り、雫を飛ばす。そしてティッシュを出して先っぽをぬぐう椎名。

「え、拭くんですか？」

「まあ、君は剥けてるから大人と同じで、振るだけで行けるのかもだけど……」

——ってというか、剥けてるからって振るだけで行けるってのは個人的には納得できないけど、男の人がみんなそういう感じなら、勝手に私の考えで変なこともさせられないしね。立ちションするとか言いだすが○ジじゃないんだから。そりゃ立ちションは汚いけどさ、女として「座りション専門だから外じゃションベンできない男」と付き合いたいと思うかってことよ。

「それにしても……」

拭き終わると、ニマッと笑いかける椎名。

「ほんとーに、逸樹くんのチン○ン立派ねー」

「やめてよ……」

恥ずかし気な逸樹。しかしやはり男である、大物を褒められて心底嫌がるわけもない。その表情の端々に浮かぶ誇らしさや喜びを目ざとく見つける熟女。

——うふふ、喜んでる。そうよね、男がチン○ン大きいって言われて本気で嫌がるわけないよね。

「あは、ちなみに……金ちゃんも立派かな？」

パンツをさらに下げる。巨棒の根元。重々しくぶら下がる宝物二つ。鶏卵より一回り大きいか。無毛のプリンとした艶のいい袋。

「いやん、こっちもプリンプリン。大きいわねえ、揉み揉みしちゃうぞ？」

「あっ」

金袋をタブタブと揉み上げる椎名。つま先立ちになる逸樹。

——あは、男の子はやっぱりみんな同じ反応ね。この大事なお宝袋をモミモミされたら、ちょっとでも逃げようとつま先立ちだよ。でもその後が違う。Sっ気あると本気で嫌がるけど、Mっ気あるとそんなに拒否しない。ちなみに私はSっ気あるから、キ○タマ握りさせてくれる人が好きで、今の旦那も出して疲れたのを玉握りで気合い入れられるぐらいのドMだから選んだ所あるし。元気出さないとキ○タマ潰しだぞー、っていうとビンビンになってくれるのよね。っていうか、あの人もドMの変態らしくかなりの巨根だけど、この子と比べたら何割か落ちるわ……あら？

「え、ちょ、なんで……」

ビクンビクンと脈打ちながら、男の柱が反り返る。

血管が浮き出す巨肉棒を、口をあぐりと開けて見る椎名。

「うわ……そんな……ウツツでしょ」

「ご、ごめんなさいー」

「い、いいのよ。いいモノ見せてもらったわ。でも、なんで立っちゃったの？」

「なんでって……別に理由なんかないけど……おばちゃんにタマタマ握られて、おばちゃん女の人だから、タマタマが痛いってこと知らないで、ギュッと握り締めてきたら怖いなって思ったら……立っちゃって……」

「ま、まあ、そうなんだ……」

——やだ、この子ドMだわ……こんなかわいいし、ドMだし……チン○ンはこんなだし、最高過ぎるでしょこんなの。た、食べちゃいたい……なんとしても、食べちゃいたいわ……

「心配しないで逸樹くん。お姉さんこう見えて……あ、お姉さんね？」

「え？」

「うふふ、お姉さんよく知ってるのよ？ 男の子の一番弱い所がどこなのか……男の子は強いからきつと逸樹くんもお姉さんより強いだろうけど……でも、もしお姉さんが逸樹くんと戦うなら、集中的に狙うからね？ 逸樹くんの、大事な大事な、弱い弱い肉のボールを」

「ひっ、そ、そんな……」

ビクビク、と強く痙攣する巨棒。

顔を赤らめ、唾をのむ逸樹。

それを見て、確信する椎名。

——やっぱりこの子、ドMだわ……いい反応してくれるわ。

涎がわずかに垂れても気づかない。目をぎらつかせ、顔かたちだけ落ち着いた大人の女の表情でほほ笑む。

微笑みつつ、優しく肉玉を揉み解す。

大人の女の長く華奢な指が二つのボールを包む肉皮の上で踊り、肉玉の硬柔らかい感触を楽しむ。

楽しみつつ、舐め回すように見るのは巨棒。根元から長い茎、皮の尽きる断崖、頭部と茎の高低差はまさに崖のようだった。

——はあー、先っぽすんごいわー。いや、何もかもすんごいんだけどね。よくパンツの中に入れてたわね。っていうか、ズボンがぶかぶかなのはこれを隠すためね。バレちゃうもんね、おチン○ンが大きいって。

考えつつ、茎の真ん中あたりに触れる。摘むとか握るではない、指はとても回らない。何とか掴むぐらいの感覚だ。

「逸樹くん、おチン○ンぶつといわねえ。男らしいわ。ほら見て、指が回らないもん」

「お、お……」

「お姉さん？ お姉さんに何か言いたいなの？ お姉さんに」

「お、お姉さん」

明らかに母親より年上の女性だとわかるが、圧に負けて「お姉さん」と呼ぶことにする気弱ショタ。

「えーっと、その、おしっこ終わったから……」

「そうね、それじゃおチンニーン、おパンツに入れちゃいましょ」

玉揉みしていた手をパンツに伸ばし、引き上げる。肉玉は巨大とはいえもちろん入る。

だが、反り立つ巨竿は無理だ。日本刀のように反りの強い巨棒は持ち主の胸のあたりまで届いているのだ。

入るわけがない。見ればわかる。

わかっていて、パンツを引っ張る。大肉玉が玉袋が収まり、玉袋がパンツに収まり、引き上げられる。長大だけにユラユラ揺れる巨棒。が、玉のことでそれどころではない逸樹。

「あっ、ちょ、た、タマタマ……」

「えいえい、おチン○ン入れちゃうぞー」

満面の笑みで、パンツをグイグイ引き上げて肉玉を持ち主の腰に押し付けて押し潰す。もちろん本気で潰そうなどとは思ってもいない。パンツで揉み解してやろう程度の力。

それでも、玉握りが終わってやっと一息つき、地面についていた逸樹の踵が再び宙に浮き、爪先立ちになる。

「ちょ、ちょ」

「うーん、これじゃおチン○ンが大きすぎてパンツに入らないわ。しょうがないわね……おチン○ン、柔らかくしてあげようか？」

「そんなことできるんですか？」

「できるよー、それじゃ、してあげるね？」

「お、お願いします」

「そういう時はオッスをつけるのよ」

「え？ オッスお願いします……ってコト？」

「ああいいっすねー。それじゃ……うふふ、お姉さんのオッパイ、どう思う？」

「す、すごく大きいです」

「そうでしょ？ このエッチッチのおっきなオッパイを……」

「え、あっ」

上着をはだけ、シャツをめくり上げて飾り気のないブラジャーに包まれた爆乳を露にする。

「うふ、お姉さんのブラジャー、地味な奴しかないのよ。なんでわかる？」

「お、大きいから種類がないとか？」

「大正解！ほんと、オッパイ大きいとブラの値段が高くて、種類もなくて大変なのよー。肩も凝るし、体重なんか、一個で二五キロは増えるから、二つで五〇キロ！並みのオッパイだったら、私の体重は余裕で四十五キロは軽いよ、わかる？」

もちろん実際に片パイ二五キロのわけもないが。椎名はこの超理論を無理やり自分に信じ込ませようとしていた。

もちろん、他人がそれを信じ込む理由はない。

「え、えー、オッパイだけで五〇キロ？ そんなのちょっと無茶……」

「キーン」

「え？」

「キーン」

ベシベシ、とスカートでしゃがんで、足を開いているので実は丸見えだった飾り気のないパンツの前を叩きつついう椎名。

パンツ丸見えなのに気づき、ドキリとする逸樹。

しつつ、椎名が発した奇妙な音と、その行動の意味に唐突に気づく。

「あっ」

思わず膝を締める。

「うふふ、ねえ逸樹くん、お姉さんの話に何か無理なところある？ お姉さんのオッパイは**片パイ三〇キロ、両方で六〇キロ**。その数字になんぞ文句でも？」

「え、三〇キロ？ そんなの流石に……」

「逸樹くん、護身術って知ってる？ お姉さんみたいな力の弱い女の子でも、君みたいな強い男の子に勝てる技なんだけど……やり方は簡単。とにかく集中的にお股を狙って……キ〇タマを潰すの。キ〇タマを潰すの。ナノメカで体を再生するいい薬があるからね、タマタマぐらい秒で治っちゃうから、遠慮なく潰しましょねって婦警さんがやってくれる女性向けの護身術教室じゃ習うのよー」

女のたしなみとして、椎名の鞆にはそのナノメカ入りの薬がしっかりと入っている。どんな怪我で

も秒で再生させる便利な薬だ、コンビニで簡単に買える。

椎名がそれを持っているかは知らない逸樹だが、そういう薬があることは普通に知っている。だから睾丸を持たない女たちがそれを「潰れてもすぐ治るからいいだろう」と遠慮なく狙ってくるという理屈にリアリティーを感じる。巨玉がギュッと引き締まる。

「ひい……さ、三十五キロ！ お姉さんのオッパイは片パイ三十五キロで両方で七〇キロですっ！」

「やだ、そんなの本体の重さ無くなっちゃうじゃん！ でも、まあそれに近い数字ではあるわね」

満面の笑みで、ブラを外す。巨大スイカ二つが白日に晒される。若い爆乳なら不思議と乳輪も小さかったり、重力に逆らって垂れなかったりするが、熟女の爆乳は相応に乳輪も突起も大きく、重さ相応に重力に引かれている。

リアルでエロい爆乳を前に、唾をのむ逸樹。

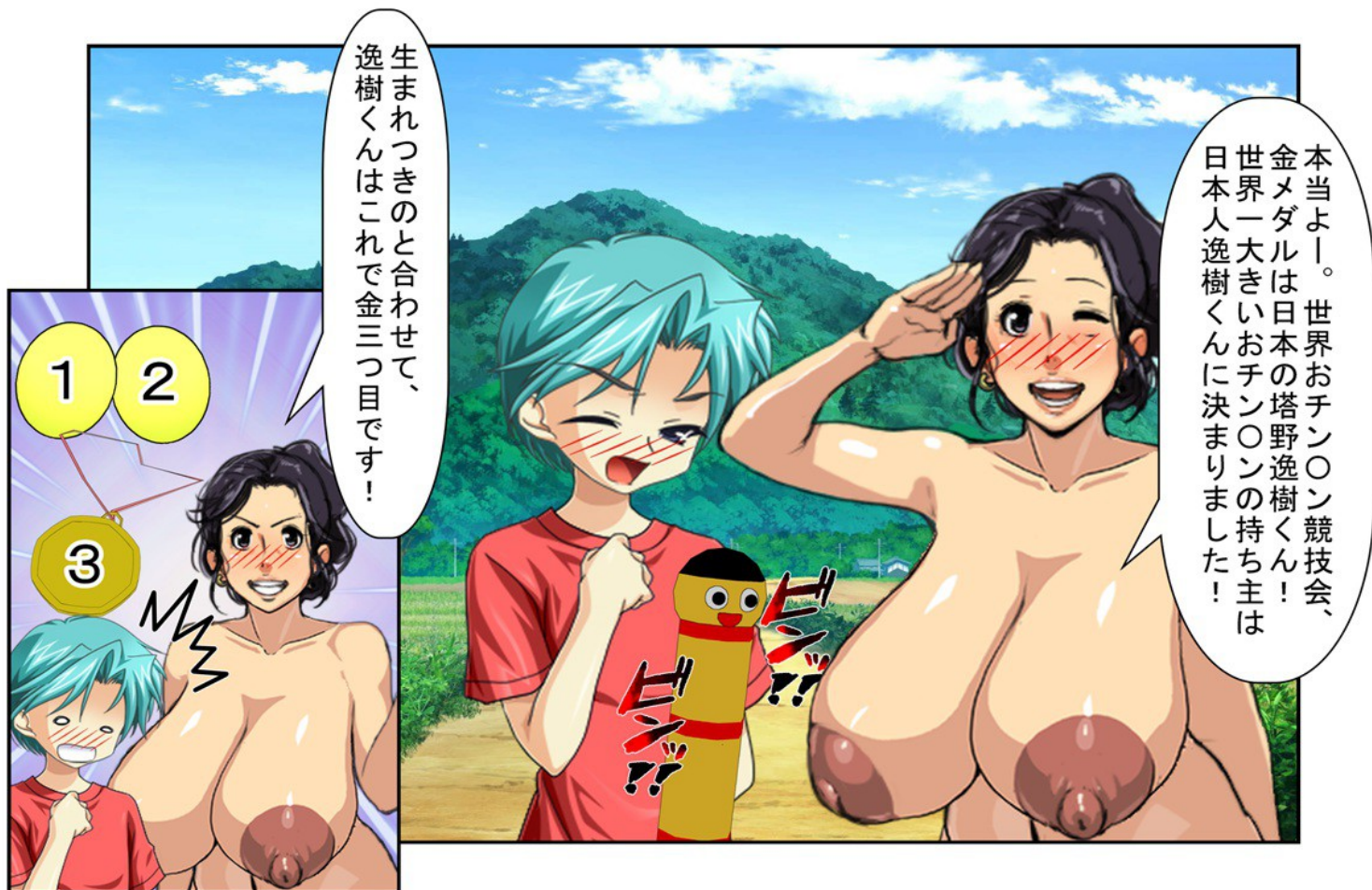
「うあ、うわ……お姉さんのオッパイ夢みたい、こんなオッパイの人がいるなんて……」

「うふふ、ありがとう。逸樹くんのおチン〇ンも夢サイズよお。大人でもドリームペ〇スだけど、君ぐらいの年の子となるともう世界一じゃない？」

「そ、そんなこと……」

顔を赤らめ、困惑しつつも誇らしさに顔をほころばせる。

「本当よー。世界おチン〇ン競技会、金メダルは日本の塔野逸樹くん！ 世界一大きいおチン〇ンの持ち主は日本人逸樹くんに決まりました！ 生まれつきのと合わせて、逸樹くんはこれで金三つ目です！」



いいつつ、寄せて上げる必要など全くない、天然I字谷間を作る巨大スイカを左右に広げ、肉厚の中に巨柱を啜え込む。

埋もれる巨柱、いや埋もれない。埋もれないのはすでに見た感じで分かっていた椎名だが、あえて目を剥いて口を開ける。

「あらあ！ 大人の物さんでも、一〇人中九人は埋もれるお姉さんのオッパイから頭出しちゃうなんて逸樹くんはほんと、ロングロングなおペ〇スの持ち主ねー。熱くてびくびくしてるわ、若いおニンニン元気一杯ねえ」

——旦那のと全然違うわ。マイボール（夫の玉は妻のモノということでマイボール）をニギニギして「元気にならなきゃ握り潰すわよ」って言ったら、元気にはなってくれるけど、ここまでパンパンで血管バキバキにはならないしねえ……っていっても、もちろん一番好きなのは旦那のマイバットなんだけど。

「うわ、お、お姉さんのオッパイ温かい……」

「温かくて柔らかいでしょ？ さらに……ベロンと」

「あっ、そんな、チン〇ンを……」

舌を伸ばし、チロチロと巨頭の上で動かして見せる。

「えへへ、舐めてあげるからねー」

「だめだよ、汚いし……あっ」

ちゅば、と口づけする熟女。口紅が巨頭を赤く染める。

「うふふ、平気平気。大人女子にとって、おチン〇んはそんな汚いもんじゃないのよ」

——ってというか、慣れよね。この子ズル剥けだからチンカスもないし、今おしっこしたばかりとはいえ、まあそれなりに我慢できるレベルよね。そして、こんなにギンギンバキバキで、汚いっていうマイナスより舐めたいっていうプラスのほうがデカいわ。この子可愛いし……

左右から爆乳を圧迫する。ベロンと舌を伸ばし、巨頭の頭を持ち上げる。タプタプと爆乳を揺らし、ベロンベロンと巨頭を舐め上げる。

「あおっ」

仰け反り、舌を突き出す逸樹。快感が巨頭から爆乳に包まれた茎、肉玉、腰、腹……と駆け上る。

「ちょ、ふあっ」

思わず意味の分からない声をあげつつ、後ろに下がる。

が、後ろは壁。

先ほど尿をかけた辺りとは違うが、同じバス停の壁だ。

背中を押し付け、逃げ場はない。

熟女によるフェラパイズリからの逃げ場は。

——巨根だけに味わうことが許されたフェラパイズリ……私はオッパイ大きすぎて、そこそこの巨根じゃ埋もれちゃうけど……だからこそ、してあげられる相手は、ああこの人スペシャルなモノ持っているわー、ってテンション上がるのよね。

がぼ、と巨頭を顎が外れそうなほど口を開けて飲み込み、舌を巨頭の周りで高速回転させる。

「あおおおお！ ちょ、まって、変な感じ……なんか出るっ！」

あまりの快感に腰がグネグネ、膝が意味もなく動き回る。爆乳に押しつぶされている巨玉が二つ引きあがるのを感じる椎名。

——もう出ちゃうんだ？ まあこんな坊やが美人のお姉さんの爆乳に挟まれながら、超絶テク味わえばそうなるのも当然よね。出しちゃいなさい。

「あう、あうっ！」

仰け反り、のたうち、両手を熟女の頭に置く。押しのけようとはしない、ただ髪を撫でつつ、巨頭に加えられるトルネードに悶える。

「ああっ、腰が勝手に動くっ、出ちゃう……なんか出ちゃうっ！」

尿は先ほどしたばかり。だから別のモノが出そうなのだとなんともなく感じている逸樹。だが頭が回るのはそこまで。

「あうっ！」

ビク、と全身を痙攣させる。ドクンドクンと巨棒が痙攣する。

——あは、でたでた……ん……ちょ、コレ、出過ぎ……？

「うぶっ！」

滝のように注ぎ込まれる白濁汁にむせる椎名。

大人女子のたしなみとして、舌でガードして喉の奥に入っこないようにしていた。それでも、量があまりに多すぎ、それを想定していなかったことでせき込む。

「ぐふっ、ごふっ」

「ああっ、でるっ、でるっ」

ドブドブと、日本刀のように反り返る巨柱から粘液が飛び出す。ビクビクと痙攣する勢いで先端が振られる。長いせいで先端の動きも大きい。

せき込みつつ、大量の粘液を顔面に浴び、ぼたぼたと爆乳に落とし、谷間にそれを貯める熟女。

——こっちがせき込んでなのに、気にせず出しまくって……ま、まあ仕方ないか。男のIQはチ○コが立ったら半分、ピストンするときゃ一〇分の一、射精時にはゼロになるもんだもんね……

と、いくら巨玉でもそれは出過ぎだろうと思えるほど大量に出して、やっと放出が終わる。

「ふう……一杯出したわね。気持ちよかったでしょ？」

「う、うん……気持ちよかった……」

「それじゃ、チン○も小さく……なってないわね。うわ……ビンビン、お元気ー、うわ……さすが、キ○タマ大きいだけはあるわ……」

あきれつつも、熱い息を吐く。

はきつつ、ちらちらと周りを見る。

山の方を見る。山といっても一つのお椀のような形ではない、高い所も低い所もある複雑な形だ。

道から見えない場所を見繕う。

「それじゃ、その山に行きましょうか。もっと気持ちいいことしてあげるから」

「もっと気持ちいいこと……」

興奮に顔を赤らめているものの、今出したばかりで少し冷静にもなっている。今味わった人生最大の快感より気持ちいいことなど、期待より恐怖が大きいほどだ。

それでも、気弱な逸樹は手を引かれれば、そり立ったままの巨棒を揺らしてついていく。

山、というか山の一部のちょっとした丘だが、その陰に入ると早速椎名はスカートをめくる。

飾り気のない熟女らしい下着が丸見えになる。

「あっ」

「うふふ、女のアソコー、ちゃんと見たことある？」

「見たいです！」

「まっ！　うれしい。こんなお婆……年上でもいいの？」

「お姉さんがいいんです。よくわからないけど、お姉さん見ると……チン○ンがすごくガチガチになっちゃって……」

反り返る巨柱。浮き出す血管。下着を凝視して、その下を透視しようとするかのような熱視線。すべてが、男に強烈に求められていることを椎名に感じさせた。

自分にまだまだ雌としての価値があると。

——うふふ、こんなかわいいデカニン若雄に求められるとか私も捨てたもんじゃないわねー。ああ、でもゴムとかないから、種付けされちゃったらどうしよう……このロングバズーカーで奥まで、デカデカゴールドで作った大量の雄汁流し込まれたら……絶対できちゃう。で、子供はもちろん男の子、生まれたときから巨根なのよ……ナースさんたちが椎名さんの息子さんのムスコさん大きいよねー、って噂したりして……

なんだか分からない妄想にふける椎名。

と、その外からは見えない丘の陰に、一人の女が近づいてくる。

紺色の服に帽子。婦警だ。

自転車で走っていて、二人が丘の陰に入っていくのが見えたのだ。自転車はバス停に止めて、椎名たちに近づいている。

——子供が、下穿いてなかったような、後ろだからよくわからなかったけど……

「ちょっとすいませーん」

丘の向こう側に声をかける婦警。

ビクッと飛び上がる椎名。

ガバ、と逸樹を抱きしめ、爆乳に顔面を押し付けて窒息させる。

「むぶっ！」

「し！　静かに……まずいわ……こんなところ見つかったら……完全にショタ食いお姉ちゃん現行犯逮捕って構図でしかないもん……ひ、ひい……そんな……家族になんていったら……」

息ができず、暴れる逸樹。全く無力だ。手足が太ももや腹、下乳、股間にも当たるが全く効かない。

「今考えてるから、おとなしくして！」

「はぶっ！」

手を伸ばす椎名。ぺしっと肉玉を指先で持ち上げるように叩き、そのまま肉袋の根元をキュッと握るだけで逸樹は身動き取れなくなる。

無意識に伸ばしていた手が熟女のパンツに当たり、指が引っかかって掴む形になるが、別に熟女は気にしない。

というか、気づいていない。

同じく股間を握りあっているのに、片や死命を制され、片や気づきもしない。

圧倒的股間弱者と股間強者の格差が見て取れた。

——どうしよう……あの声は、交番の、大西さんじゃない。うう、警察が、男の人だったら……ワンチャン顔隠して、タマタマ攻撃で動けなくして逃げることもできるかもしれないけど、女の人相手じゃ……

根っからのドS女子らしく、相手が誰だろうが付いているなら遠慮なく狙っていく気満々だ。

しかし婦警相手となると、どうしようもない。別に椎名は強いわけでもないのだ。

「いるんでしょ？　近づきますよ」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

「あ、椎名さんですね？ 一緒にいるの、誰ですか？ 何してるんですか？」

「いや、その……」

「ぶっちゃけるとですね、小さい男の子が、下半身丸出しで入っていったように見えたので……念のためにどういう事なのか確かめようと」

「そ、そんなことするわけないじゃないですか……」

「そうですね。小さい男の子を裸にして引き込むなんてありえませんよね。そんなの、即逮捕なんだから」

「で、ですよー」

「男の人ってやらしいから、女に甘い顔するけど、女はそういうの無いですからね」

「そうですねー」

青ざめて震える椎名。逸樹もぐったりする。こちらは息ができないからだが。

「何もないんですよ？ そっちに行きますよ？」

「あ、そ、その……」

ショタ好き爆乳熟女、タイーホ秒読みか。

体験版終わり

気に入っていただけたら、ぜひ製品版もお買い上げください

サークルをフォローしていただけると励みになりますのでそちらもぜひお願いいたします